

斜面地における空き家・空き地の活用を通じた 若者の地域コミュニティへの参加に関する実証的研究

藤崎大河*・安武敦子**

Empirical research on youth participation in local communities through the utilization of vacant house and lot on sloped district

by

Taiga FUJISAKI* and Atsuko YASUTAKE**

The purpose of this research is to determine the effectiveness of an attempt to promote youth participation in local communities through the utilization of vacant houses and lots by university students. The results of the study revealed that although it is difficult for young people to participate in the management of community associations, it has the potential to lower the hurdle of interaction between the community and the youth. It was also clarified that there is a need for a hub function between the two, which can coordinate the relationship between them and promote continuous interaction.

Finally, COVID-19 has a significant impact on community activities. Careful prescriptions, including infection control, are needed to promote exchanges.

Key words : local community, sloped district, vacant house, vacant lot, youth participation

1 初めに

1.1 背景と目的

日本の多くの地方都市では、少子高齢化の影響により地域コミュニティの維持管理が危ぶまれている。厚生労働省が2015年に行った調査¹⁾では、町内会・自治会への参加頻度は年齢が若くなるにつれて低くなっており、「参加していない」と回答した割合は30代で74.9%、20代では85.1%にも上る。また、少子高齢化や人口流出により空き家の増加も深刻化しており、2018年の時点で全国の空き家率は13.6%となっている²⁾。適切な管理が行われていない空き家が、防災・防犯・景観等、様々な側面で地域住民の生活に悪影響を及ぼしていることから、2015年に「空き家等対策の推進に関する特別措置法」が施行されるなど、空き家問題に対する関心が年々高まっている。近年、その空き家を住宅やカフェ、オフィス等としてリノベーションし活用することで、空き家対策と同時に新たな価値を生み出す試みが全国で行われている。

本研究では、空き家をコミュニティスペースやイベ

ントスペースとして改修・活用し、地域コミュニティの活性化を目的とするものに焦点を当てて調査・分析し、その活用プロセスと、地域コミュニティ維持・空き家増加の両問題に対する有効性を明らかにすることを目的とする。具体的には、長崎県長崎市坂本町の活用事例「CRANE」を対象に参与観察を行い、その活用実態、地域との関わり方（特に、コミュニティ維持の鍵を握る若い世代がどのように参画するか）について明らかにする。

1.2 研究の位置づけ

コミュニティ施設としての空き家の活用については、久氏や豊島氏、竹内氏、進藤氏らが論じている。久氏の「郊外住宅地における空き家の地域コミュニティ施設への転用条件に関する研究」³⁾では、2つの実例調査を通して、空き家をコミュニティ施設として活用するためには①社会的信用のある主体が仲介者になること、②住民に開かれていること、③公的機関からの補助金があること、が必要であると明らかにされている。豊島氏や竹内氏、進藤氏の「コミュニティデザインとし

令和3年12月20日受理

* 工学研究科 (Graduate School of Engineering)

** システム科学部門 (Division of System Science)

ての空き家活用プロジェクトの実践に関する研究（その1～その3）」⁴⁻⁶⁾では、多主体協同行なう空き家デザインワークショップ（以下WS）を通したまちづくり活動について、その活動プロセスについて明らかにされている。しかし、具体的な空き家の活用実態や地域との交流について詳細に述べたものはなく、若者の参画に焦点を当てたものもない。

1. 3 対象地・対象自治会と研究方法

1. 3. 1 対象地・対象自治会

対象とする坂本地区は長崎市中心部に位置しており、アクセスはJR浦上駅から徒歩10分ほどである。1～3丁目まであり、2021年9月時点で人口1,955人、1,224世帯の規模である。狭隘な坂道が続く斜面市街地であり、階段部分も多く存在するためバイクも侵入できず、高齢化や空き家の増加が進んでいる。しかし、長崎市が施行する「立地適正化計画」⁷⁾では、広い範囲が「居住誘導地区」（斜度が高い部分は「自然共生区域」）に定められており、「安心・安全で快適な暮らしの提供」を目指している。

山王自治会は坂本1丁目、2丁目の世帯が加入しており、2021年11月時点で全36班、253世帯の規模である。地区内には坂本小学校や山王保育園が位置しており、数年前までは子供会や青年会が存在したが、少子高齢化や子持ち世帯の平地への移住により活動がなくなっている状況である。また長崎大学医学部キャンパスや大学病院も隣接しており、大学生が多く居住しているが、学生と自治会との関りはない。

2020年11月に自治会員に行なったアンケートの回答者(159/250名)の年齢層を見ると、最も多い年齢層は60代で35.2%、次に70代が32.7%であり、一番若い年代は30代が1名のみと、高齢化が深刻化していることが分かる(図1)。さらに、自治会役員(会長、副会長、班長)の38名について見てみると、60代が71.1%、70代が18.4%と、運営の高齢化が見て取れる(図2)。

CRANEは坂本2丁目に位置しており、築約60年、木造平屋建ての2軒長屋として利用されていたが、5、6年間空き家になっていた。長崎大学工学部の学生が2018年10月から約1年間かけて改修を行ない、2019年11月にオープンした。オープン後は、学生と地域住民の交流促進を目的として、イベントを主催したりレンタルスペースとして貸出すことで若者が地域を訪れる機会を創出している。

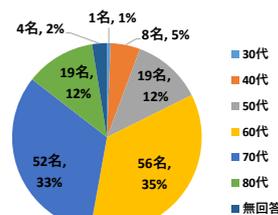


図1 山王自治会年齢分布 (n=159/250 世帯)

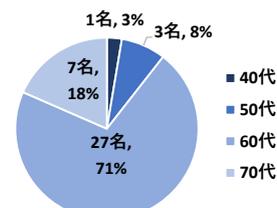


図2 山王自治会役員の年齢分布 (n=38)

1. 3. 2 研究方法

2020年7月から山王自治会に加入し、月1回行われる班長会や被爆者慰霊祭等の行事に定期的に参加しながら参与観察を行った。

CRANE オープンから1年後の2020年11月に、山王自治会の全世帯(253世帯)に対して、CRANEに対する認知度や期待する事、若者に対する意識等についてアンケート調査を行った。さらに1年後の2021年11月に、同様の項目に加え、コロナウイルスが地域活動やイベントへの参加に与えた影響についての項目を設け、アンケート調査を行った。

CRANEの利用者に対し、2020年11月18日から2021年8月まで、CRANEの外観や内観、設備の充実度等についてアンケート調査を行った。

CRANE発足のきっかけとなった斜面地活用団体「長崎HOPs」について、2018年度の実践報告書と、2021年にメンバーの一人であるY氏に聞き取りを行い、活動内容やその流れについて調査した。

2 多主体連携による斜面地・空き家活用

2. 1 長崎HOPs (Hillside Open projects) について

長崎HOPsは、2016年に長崎大学(工学部、医学部保健学科)、長崎大学地方創生推進本部、長崎留学生支援センター、NPO長崎斜面研究会、斜面地・空き家活用団体つくる(以下「つくる」)、(株)谷川建設、長崎市住宅課等が参集し発足した斜面地活用団体である。長崎市が抱える人口減少と空き家・空き地の増加という社会問題への対応を目的とし、テーマとして「斜面地の空き家活用事業のさらなる展開」、「坂の町の暮らしの継続へ向けた地域での活動」、「留学生の受け皿となる住宅の確保」、「斜面地における地域連携型学生シェアハウスづくり」を挙げていた。設立当初のメンバーの年齢層は、20代が1名、30代が1名、40代が2名、50代が1名、60代が2名、70代が1名と、幅広い年齢層で構成されており、月1回行われる定例会にはオブザーバーとして学生や若手社会人が参加し、意見交換を行っていた。主に空き家・空き地の視察、活用案検討などの活動を行っていたが、2020年のコロナウ

イルス流行の影響を受けて定例会の開催が難しくなる
と同時に、HOPsの活動は収束していった。

活動内容とその活動主体について詳細に見ていく
(表1)。空き家・空き地の活用では、活用経験のある
「つくる」がアドバイザーとして指南しながら、HOPs
メンバーで空き家・空き地の視察や活用案の検討を行
ったり、利用希望者との仲介を行っていた。2021年
11月現在で活用されているのは、コミュニティスペース
が1軒(CRANE)、シェアハウスが3軒である。しか
し、当初目的としていた留学生の利用はなく、地域
コミュニティとの関係を保っているのはCRANEと、
それに隣接するシェアハウスのみである。活用を断念
した原因としては、所有者との折り合いがつかないこ
とや採算性の問題、法的な問題等があった。

HOPsでは、「HOPs型シェアハウス」として、空き
家所有者と学生、学生と地域をつなぐ新たな形のシェ
アハウスモデルを考案した。「つくる」がマスターリー
スしながら、HOPsメンバーと協力しながらハブとし
て関係性を調整し、居住者には地域活動のレクチャー
や地域住民との顔合わせ、地域交流のサポートを行な
う。実用に向けて、谷川建設がシェアハウスのクレ
ームの洗い出し、斜面研究会が資金的・法的整備、「つ
くる」が学生と地域の関わり方や入居者マニュアルの作
成をそれぞれ行った。現在このモデルが機能している
のはCRANEに隣接するシェアハウスのみで、他の2
軒のシェアハウスは独立して活用がなされている。

次節では、CRANE、隣接するシェアハウス、それら
に関連して活用がなされた畑について、各活動の変遷
と地域との交流についてまとめる。

表1 HOPs活動内容とその詳細

活動内容	活動主体	詳細
空き家・空き地活用		
・南山手町の空き家	つくる	HOPs結成前からシェアハウス兼イベントスペースとして空き家を改修しており、アドバイザーとして加入。現在も2名で入居しながら住み開きイベント、まちづくり活動を行う。
・坂本1・2丁目の空き家(所有者の同じ4軒)	斜面研究会	内1軒はシェアハウスとして活用予定であったが、費用と家主との意向で折り合いが合わず断念。他3軒は大規模道路工事に伴い家主が売却し断念。
・坂本2丁目の空き家2軒、空き地(3つが隣接)	長崎大学工学部Y研究室	空き家のうち1軒はシェアハウスとして改修し現在3名で入居、1軒はCRANEとして活用。空き地はCRANEの活動の一環として活用。
・江平3丁目の空き家	谷川建設	購入して改修・活用予定であったが、採算の見通しつかず断念。
・坂本2丁目の空き地(長大の農業サークル)	長大農業部	一度は整備し収穫等を行っていたが、部員減少・コロナ流行の影響により現在は活用無し。
・西山2丁目の空き家	HOPs(仲介のみ)	学生が自主的に小規模な改修をしながら現在まで入居。HOPsは仲介のみ行い、その後は独立して活動。
・清水町の空き家	留学支援センター TechHouse.Works Inc.	留学生用住宅として改修。しかし現在は工学部学生のシェアハウスとして活用されている。HOPsは仲介のみ行い、その後は独立して活動。
補助金申請	斜面研究会	九州ろうきんNPO助成(不採用) 長崎市交流の産業化補助(不採用) 長崎大学プロジェクト(農業部の活動として採択)
留学生のシェアハウスに対する意識調査(アンケート)	留学支援センター	2017年1月~3月の期間に、109名の回答を得た。約7割の学生がシェアハウスでの生活と地域活動に興味を示しており、地域との交流を取り入れたシェアハウスを運営することでニーズに答えられる可能性があることが分かった。
HOPs型シェアハウス運営手法・マニュアルづくり	谷川建設 斜面研究会 つくる	共同で法的問題や入居者間・近隣トラブルの整理を行い、つくるが入居者の生活マニュアルや契約書を作成。坂本のシェアハウスでは、つくるが所有者と入居者の間に入り、マスターリースしながら相談役を担っている。
坂本地区山王自治会での地域住民向け健康体操	医学部保健学科	2017年5月から毎月開催。コロナの影響により、2020年10月を最後に閉会。
定例会の整備	長崎市住宅課	定例会のスケジュールやアポイントなどの整備を長崎市住宅課が主導。

2. 2 坂本地区における HOPs 関連活動 (図 3)

CRANE とシェアハウス、畑は、図 4 のように隣接している。

2. 2. 2 HOPs 型シェアハウス居住者の地域参画

シェアハウスには、2017年12月に活動紹介懇話会を開催した際に興味を持った学生のA氏が2018年3月に入居、その後4月に友人のB氏、10月に友人のC氏が入居した。入居の際にはHOPsが立ち会い自治会役員に挨拶をしたほか、地域住民向けに健康体操を行う医学部保健学科や、畑①で活動していた長崎大学農楽部、CRANEを改修する工学部学生との交流をサポートした。入居者は世帯として自治会に加入しており、A氏、B氏は山王神社豆まきや餅つき等、自ら積極的に参加していた。しかしC氏は地域に対する関心は薄く、交流は少なかった。3名は2019年3月に大学卒業と同時に退去したが、退去時にHOPsがヒアリングを行なったところ、「自治会長さんや班長さんが日頃からよくしてくださり、とても感謝している。」「卒業後も地域との繋がりを大切にしていきたい。」と、地域交流に前向きな感想を抱いていた。その後1年間空室のままとなったが、2020年4月にCRANE代表のD氏と、その友人であるE氏が入居し、同年6月に後輩のF氏が入居した。D氏は7月に自治会に加入し、月1回行なわれる班長会や餅つき大会、被爆者慰霊祭等に参加し、交流やCRANEの活動報告を行なった。E氏とF氏は地域への関心は薄く、交流は少なかった。E氏は卒業と同時に退去し、入れ替わりでG氏が入居した。

限られた期間ではあるが、学生が代る代る入居し、HOPsの仲介によりその都度地域との関係性を築いていることがわかる。

2. 2. 3 空き地の活用

HOPsやCRANEの活動と関連して、空き地を畑として活用する試みも見られる。

畑①では、HOPsがサポートしながら農楽部が地域の方の協力を得ながら開拓をしており、シェアハウス居住者もHOPsの仲介により開拓に参加していた。しかし、部員の減少により次第に活動はなくなっていった。畑②は、D氏が入居後に所有者である山王神社に交渉し、畑として活用を始めた。活用にあたって自治会での報告を行ったところ、地域住民の一人が倉庫にある道具をいつでも使っていていいと協力を申し出た。その後も、道具の使い方を指導したり、畑でできた野菜をおすそ分けしあったりと交流を続けている。

このように、HOPsとしての活動がなくなった後も、シェアハウスやCRANE、畑の活用を通して、学生と地域、学生同士の交流が続いていることがわかった。



図3 坂本地区におけるHOPs関連活動



図4 シェアハウス, CRANE, 畑位置関係(地図: Google Map)

3 空き家活用による地域外との関わり
3.1 CRANEの利用状況(表2)

CRANEでは定期的にイベントを主催する他、レンタルスペースとして貸出を行っており、その予約経路は、知人としての予約に加え、Instagram、インターネットサイトSPACEMARKET注2)を用いている。

これまでに主催した主なイベントは、織物WS、クリスマス演奏会、シルクスクリーン体験、キャンドル作りWS&ライトアップ等である(写真1)。レンタルスペースとしては、勉強やPC作業、動画の撮影、部活のミーティング、音楽系サークルのライブイベントなど様々な用途で利用されている(写真2)。

表2 CRANE利用年表

日時	内容	利用者	年齢	人数	予約経路
11月	OPEN記念打ち上げ	大学生, HOPsメンバー, 地域住民	20代~60代	10名	CRANE主催
	織物WS	大学生, アーティスト	20代, 30代	8名	CRANE主催
2020年2月	織物展覧会・ゲーム大会開催	大学生, アーティスト, HOPsメンバー	20代, 30代	7名	CRANE主催
3月	食器のアレンジ	大学生, その生徒	40代~60代	13名	SPACEMARKET
5月	PC作業	大学生	20代	1名	Instagram
7月	仕事の打ち合わせ	卸売業の会社, その顧客	30代~50代	3名	SPACEMARKET
	仕事の打ち合わせ	卸売業の会社, その顧客	30代~50代	3名	SPACEMARKET
	等の演奏と日本舞踊	舞踏家, その観客	30代, 50代~80代	4名	SPACEMARKET
8月	ローカルメディア取材	ローカルメディアumya	30代	2名	知人
10月	大学の地方創生プロジェクト	大学生	20代	4名	知人
	部活のビデオミーティング	大学生	20代	6名	知人
11月	動画撮影	プロジョグラマー	20代	1名	SPACEMARKET
12月	ジャグリング教室のクリスマス会	プロジョグラマー, 小学生	~10歳, 10代, 20代	12名	SPACEMARKET
	一周年記念コンサート, シルクスクリーンWS	大学生, アーティスト, 地域住民	20代~60代	13名	CRANE主催
2021年2月	スピリチュアル系ワークショップ	大学生, アーティスト	30代~60代	4名	SPACEMARKET
3月	動画撮影	会社員	30代	1名	Instagram
	部活のビデオミーティング	大学生	20代	6名	知人
	学生サークルのライブ	大学生	20代	13名	Instagram
7月	女子会	主婦	20代	4名	Instagram
	イベントの動画撮影	大学生	20代	4名	Instagram
8月	キャンドルづくりWS	小学生, 親	~10歳, 10代, 40代	9名	CRANE主催
	キャンドルづくりWS&ライトアップ	小学生, 親	~10歳, 10代, 40代	9名	CRANE主催
10月	勉強	大学生	20代	1名	Instagram
	NBCラジオ取材	NBC	20代	2名	Instagram
12月	アカペラ演奏会	大学生, 地域住民	20代~60代	35名	CRANE主催
	サバイバルゲーム勉強会	社外人	20代~40代	12名	SPACEMARKET



写真1 シルクスクリーン体験



写真2 音楽系サークルによるライブ

3.2 CRANE利用者の分析

2020年11月18日から2021年8月までの利用者の属性を分析すると、年齢は20代が45名(75.0%)と最も多く、次に30代と10歳未満が4名(6.7%)と同率で続いた(図5)。20代を中心として若者が地域を訪れる機会は創出できていると言える。一方で、50代については0名、60代については2名と年配の方の利用が極端に少なく、空き家内で互いの交流を活性化できているとは言えない。

しかし、CRANEの玄関先や前面道路で、通りかかる地域の方と参加者として「こんにちは」「なにしてるんね」「にぎやかやね」などと会話をする機会はしばしば見られ、間接的に地域住民との交流を生み出すことはできていると言える。

CRANEを知ったきっかけについては、「知人を通じて」が38名(63.3%)と最も多く、次に「SNS」が10名(16.7%),「SPACE MARKET」が5名(8.3%)と続いた(図6)。「知人を通じて」については、SPACE MARKETやSNSで予約した代表者を通じて知った人も含まれていると考えられる。自治会に参加する際にイベントの告知を行っているが、山王自治会から参加したのは1名のみであった。

CRANEの各要素についての満足度を5段階で評価してもらったところ(図7)、最も評価が高かったのは「照明等の内装の雰囲気」で、満足が51名(85%)であった。対して、外装の雰囲気は満足と回答した人が26名(43.3%)と2番目に低く、改善が必要であることが分かった。料金設定については、立地等を考慮して3時間500円という設定で貸し出しを行っているが、不満と回答した人はいなかった。安全性については、35名(58.3%)と過半数が満足と回答しており、不満に感じている人はいなかった。空調等の室内環境については31名(51.7%)と過半数の人が満足と回答しているが、不満と回答した人の数が3名と最も多かった。金額や気密性の問題からエアコンを設置しておらず、夏は扇風機、冬は灯油ストーブで対応しているが、十分ではなかったと言える。最も満足度が低かったのは立地や周辺環境で、満足と回答した人は14名(23.3%)と少なく、「不満」、「やや不満」と回答した人は合わせて13名(21.7%)と最も多かった。自由記述欄には「坂がきつい」「近くに買い出しに行ける場所がない」「地図を見ても場所が分かりづらい」等の声が上がっており、狭隘な道の続く斜面地がゆえの問題点が浮き彫りになった。総合的な評価は60.0%が満足、33.3%がやや満足と回答しており、満足度は高い結果となった。

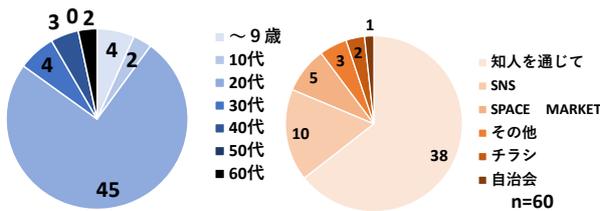


図5 CRANE利用者年齢分布 図6 CRANEを知ったきっかけ

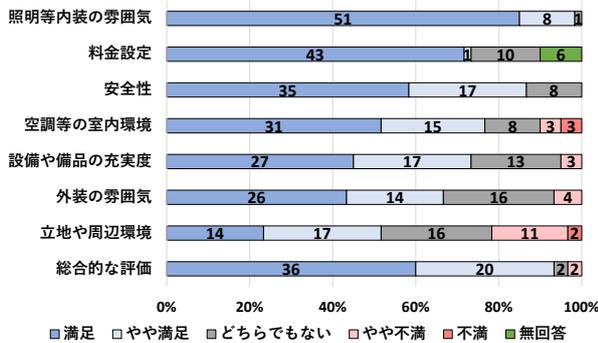


図7 CRANE各要素の満足度

4 空き家活用による地域との関わり

4.1 地域住民からの認知状況

CRANEについての地域住民の認知度について、オープンから1年後の2020年11月と、2年後の2021年11月に自治会員253世帯にアンケート調査を行った(図8)。2020年の調査では、98名(61.6%)が「全く知らなかった」と回答しており、「中の様子を見たことがある」のは8名(5.0%)、活動内容を知っているのは1名(0.6%)と、活動が知られていなかったことが分かる。しかし、2021年には、「全く知らなかった」と回答した人は26名(21.1%)と、前年比で65.7%も減少している。また、「外観のみ見たことがある」「聞いたことはある」と回答した人はそれぞれ前年比で30.1%、81.7%増加しており、認知度は上昇していることが分かった。一方で、「中の様子を見たことがある」と回答した人は1.1%増加と、ほとんど変化がない。

CRANEを知ったきっかけについては(図9)、2020年も2021年も「自治会での紹介」や「前を通りかかった時に」と回答した人の割合が多く、「知人」や「SNSやネット」はごく少数であった。地域住民に対しては、SNSやネットは宣伝効果が薄く、自治会での宣伝が最も有効であるということが分かる。2021年に追加した項目として、「地域の掲示板」、「新聞やラジオ」、「前回のアンケート」があるが、「地域の掲示板」に関してはイベントの際に1週間掲示したのみ、「新聞やラジオ」に関しては、新聞に1度、ラジオに5分間の出演が1度のみであったことを考えると、2つの宣伝効果は高いと言える。また、前回のアンケートで認知した方が

15名(12.2%)おり、継続的にアンケートを行なうことが認知度向上にも繋がるということがわかった。

2020年のアンケート結果について、班ごとに「外観を見たことがある」、「中の様子を見たことがある」「どんな活動をしているか知っていた」人の割合を出し(該当人数/回答人数)、地図と照らし合わせてみると(図10)、CRANEよりも標高が高く、かつ前面の道沿いの世帯で割合が高い傾向にあり、逆にCRANEよりも標高が高くて、道が異なると見たことがある人の割合は低い傾向にあった。坂本町では、水平方向に繋がる道が少なかったり非常に狭い場合が多く、生活圏が垂直方向に区切られているためであると考えられる。

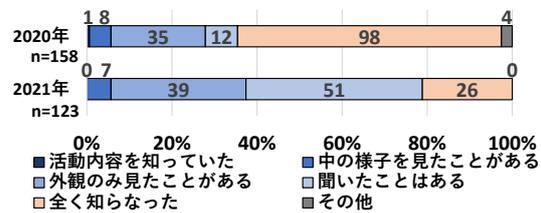


図8 地域住民のCRANE認知度

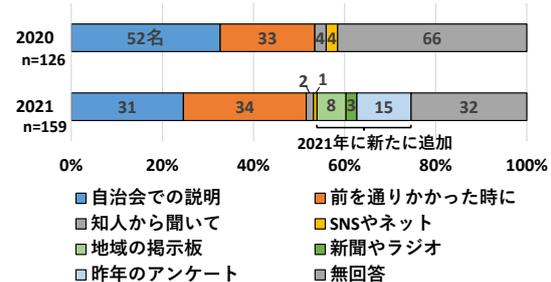


図9 CRANEを知ったきっかけ

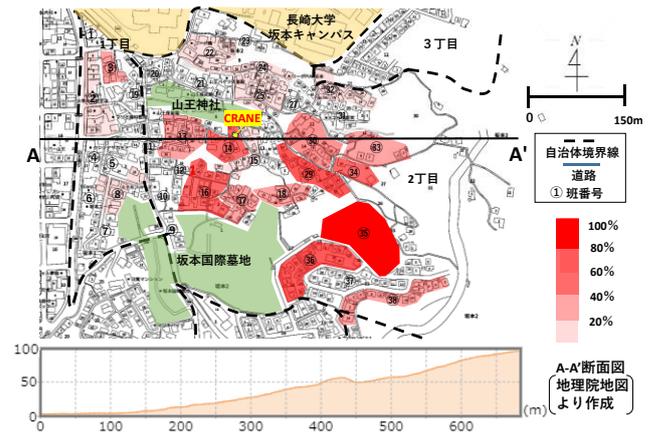


図10 班別認知度(地図:ゼンリン住宅地図2015年)

5 コロナウイルスの影響

山王自治会の自治会活動と長崎県内のコロナ感染者の推移を併せて見ると(図11)、感染者が多くなり始めた時期に活動を再開していたり、逆にほとんど感染者が少ない時期に中止の判断がなされている部分が見られた。例えば、感染者が初めて確認された4月に中

役割を果たす可能性があると言える。

CRANE の各要素については、立地に対する満足度が最も低く、階段の続く斜面地という条件が空き家の利活用を難しくしていることを示唆していた。しかし、内観についての満足度は高く、従来の木造の雰囲気を活かした空間作りが価値を生むことも明らかになった。

コロナウイルスは自治会活動に混乱を招き、外出頻度や住民間の交流に大きな影響を与えていた。2 度のワクチン接種をきっかけに徐々に状況が回復しているが、流行前と同程度の状況にまで回復するにはまだまだ時間がかかると予測される。

コロナウイルス流行により生活や価値観が変化した今、感染症に対する対策や、地域住民とのより慎重な関係調整が求められる。

謝辞： 研究を進めるにあたって、参与観察やアンケート調査にご協力頂きました山王自治会の皆様、また、CRANE の改修やイベント開催にご協力頂きました「つくる」岩本氏をはじめとする皆様、並びにご利用者様、誠にありがとうございました。

この研究活動は、令和 2 年度前田記念工学振興財団の研究助成を受けて行った。

注釈

注 1) 2018 年 4 月策定。人口減少や高齢化が進行していく中で「コンパクトシティ」の形成を積極的に推進するため都市全体の観点から作成する、居住機能や医療・福祉・商業等の立地、公共交通の充実に関する包括的なマスタープラン（都市計画マスタープランの高度化版）である。都市機能誘導区域や居住誘導区域、自然共生区域等を定め、他の関連計画と連動しながら誘導を図っていく。

注 2) 貸会議室や民泊、イベントスペース等のスペースを時間単位で貸し出すインターネットサービスである。2014 年 1 月に株式会社スペースマーケットによりサービスが開始され、2015 年度にはグッドデザイン賞を獲得するなど近年注目されている。CRANE は 2020 年 1 月に登録をし、活用している。

参考文献

- 1) 平成27年版厚生労働白書—人口減少社会を考える
- 2) 平成30年住宅・土地統計調査
- 3) 久隆浩, 郊外住宅空き家の地域コミュニティ施設

への転用条件に関する考察, 2006年7月, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p935~936

- 4) 豊島未来, 空き家の利活用デザインを媒介としたまちづくり活動の解説 コミュニティデザインとしての空き家利活用プロジェクトの実践に関する研究(その1), 2016年8月, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p473~474
- 5) 進藤拓哉, 多主体協働による空き家の利活用デザイン コミュニティデザインとしての空き家利活用プロジェクトの実践に関する研究(その2), 2016年8月, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p475~476
- 6) 竹内萌, 空き家の利活用デザインを媒介としたまちづくり コミュニティデザインとしての空き家利用プロジェクトの実践に関する研究(その3), 2016年8月, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p477~478
- 7) 鶴地宏海, 空き家改修による地域再生の可能性の検証, 2019年7月, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p43~44
- 8) 鶴地宏海, 縮退エリアにおける空き家活用した拠点づくりの実証的研究—長崎市坂本町を対象に一, 2020年3月, 日本建築学会九州支部研究報告集, p197~200